燈榛

白礬を水に加へ燈心を煮て、ともし火に點ずれば、あぶらの減る事すくなし、

〔書言字考節用集七器財〕燈榛（カキタテギ代醉、桃剔灯火之杖曰榛、）燈剡（同）

〔類聚名物考調度十八〕剔燈捧兒　ともしびのかきあげぎ　撥揚木

笑府、一人晩向寺中借宿云、我有箇世々用不盡的物件、送與寶寺、寺僧喜而留之、且加恭敬、至次早請問、世々用不盡的、是何麼物件、其人指佛前一樹破簾子云、將此物作剔燈捧兒、生々世々、那裏用得不盡、

燈臺打敷

〔物類稱呼四器用〕灯榛かきたてぎ（とうしんをさえ）　備後福山にて、へげ〳〵と云、筑後國久留目にて、さんとくといふ、越前にて、かきたてぐゐ、越後にて、かんだしといふ、

〔宗五大草紙下〕殿中さま〴〵の事

一女中方にとぼされ候御燈臺、（略○中）かき立木は、うすおしきを廣さ二分計にわりて、かはらけの上にをき申候、

〔十訓抄二〕成範卿事ありてめしかへされて、內裏に參られたりけるに、むかしは女房の入立なりし人の、今はさもあらざりければ、女房の中より昔を思出て、

雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの內やゆかしき、とよみ出したりけるを、返事せんとて、灯爐のきはによりけるほどに、小松のおとゞの參給ひければ、急たちのくとて、とうろの火のかきあげの木のはしにて、やもじをけちて、そばにぞ文字をかきて、みすの內へさし入て出られにけり、

〔大饗雜事〕一燈臺十四本（略○中）

打敷十四枚料絹十四丈（一疋六丈也、枚別一丈、）

〔三中口傳三〕一鋪設裝束事